

書評 新刊 紹介



藻類多様性の生物学

千原光雄 編著 内田老鶴圃刊

386 ページ

定価 9,000 円 1997



千原光雄先生ならびにその峻英な門下生の方々による藻類学の教科書「藻類多様性の生物学」が出版された。藻類研究者はもとより藻類に関心を寄せる多くの人々の待望の書である。かつての藻類学の教科書は、分類学が主流で、この分野の限られ

た研究者以外の人々にとっては、概して敷居の高いものであった。藻類と呼ばれるグループが、形態、生態、さらに生理、生化学の面でも極めて多様であるがゆえに専門性を必要とし、そのため、一個人または小人数の共著による一般的な教科書ができにくかった。それが、藻類の知識の普及を阻んできた。本書は、千原先生の広い見識と元門下生各位の幅広い勉強ぶりが如実に感じられる書物である。分類学的知見も十分に網羅されているので、専門外の人が分類の記載を必要とするときは当然この書物を引用すればよいと思われる。ことに藻類の系統に関する記述は充実しており、外国の藻類教科書にも例をみない。また、形態形成や生理学、生態学等もかなり興味深く書かれているので、藻類の一般的知識を補充するには十分な教科書である。ただ、生命科学が日々進展する今日、本書に書かれた一般的知識のいくらかは、やがて塗り変えられる運命にある。教科書とはそのような運命にあるもので、本書も絶対不変の知識の庫としてではなく柔軟に接する必要がある。

「藻類を研究している」というとまず聞かれることは「食べられるか」ということであった。「食べられない」というと話が白けてしまって「いい趣味ですね」ということになってしまう。そういう世の中の受けとめ方が近年変わってきた。植物学会大会でも、藻類を実験材料とする研究が、急増した。十数年前までは、藻類は植物界の隅のほうにあって、変わりものの存在として遠慮がちに陸上植物に従属していた感があった。

近年、長らく高等植物を材料としてきた研究者の多くが、藻類に目を向けるようになってきた。陸上環境に適応するためにあらゆる修飾が加えられてきた高等植物を使うよりも、祖先型の生物を使うことによって、生命の本質がよく見えてくるからである。さらに陸上植物は、藻類の一系統であることから、藻類の世界における生命活動の多様性は、陸上植物の研究からは到底見えてこない。生命の探究は、多様な研究から相乗的に進歩するものであって、狭い視野において深く研究しても進展しないものである。

一方、地球環境問題への近年の課題として、藻類が浮上し、世の中の関心が深まったことは言うまでもない。したがって、藻類の研究者は近年急速に増えつつある。しかし、そこで一つの大きな懸念に直面した。実際には「藻類を知らない藻類の研究者が急速に増えつつある」ということである。ある研究では、藻類の生命活動の多様性を理解しないで、画一的に市販の試薬と同じような扱いで藻類を使っている。またある場合は、藻類の生活環の多様性を考慮にいれない実験系を組んでいたり、また、材料とする藻がどのような状態でどこに生育しているのかまったく知らないという場合もある。そのような研究から得られた結論は当然間違いが多い。そしてもっと憂慮されることは、このような論文の査読者が藻類を知らないためにそれを批判できないことである。

いまや、藻類の専門家は、専門性のなかに閉じこめることなく、各自がもつ知見を広く公開し、藻類への理解を促さなければならない。

このような意味で、本書は、生命科学に携わる人および関心のある人への的を射た教科書である。本書が他分野の研究者にも広く読まれ、ことに生命科学の研究室に、「藻類」の辞書として置かれることを進めたい。

石川依久子（海洋バイオテクノロジー研究所）